

# 温泉

梶井基次郎

青空文庫



夜になるとその谷間は真黒な闇に呑まれてしまう。闇の底をごうごうと溪たにが流れている。私の毎夜下りてゆく浴場はその溪ぎわにあった。

浴場は石とセメントで築きあげた、地下牢のような感じの共同湯であった。その巖がんじよ丈うな石の壁は豪雨のたびごとに汎濫する溪の水を支えとめるためで、その壁に刳くり抜かれた溪ぎわへの一つの出口がまた牢門そっくりなのであった。昼間その温泉に涵ひたりながら「牢門」のそとを眺めていると、明るい日光の下で白く白く高まっている瀬のたぎりが眼の高さに見えた。差し出ている楓かえでの枝が見えた。そのアーチ形の風景のなかを弾丸のように川鳥かわわうが飛び抜けた。

また夕方、溪ぎわへ出ていた人があたりの暗くなつたのに驚いてその門へ引返して来ようとするとき、ふと眼の前に——その牢門のなかに——楽しく電燈がともり、濛もうもう々と立ち罩こめた湯気のなかに、賑やかに男や女の肢体が浮動しているのを見る。そんなとき人は、今まで自然のなかで忘れ去っていた人間仲間の楽しさを切なく胸に染めるのである。そし

てそんなこともこのアーチ形の牢門のさせるわざなのであった。

私が寝る前に入浴するのはいつも人々の寝しずまった真夜中であつた。その時刻にはもう誰も来ない。ごうごうと鳴り響く溪の音ばかりが耳について、おきまりの恐怖が変に私を落着かせないのである。もつとも恐怖とはいふものの、私はそれを文字通りに感じていたのではない。文字通りの気持から言えば、身体に一種の リフラクシオン 抵抗を感じるのであった。だから夜更けて湯へゆくことはその抵抗だけのエネルギーを余分に持って行かなければならないといつも考えていた。またそう考えることは定まらない不安定な、埒よちのない恐怖にある限界を与えることになるのであつた。しかしそうやって毎夜おそく湯へ下りてゆくのがたび重なるとともに、私は自分の恐怖があるきまつた形を持っているのに気がつくようになった。それを言つて見ればこうである。

その浴場は非常に広くて真中で二つに仕切られていた。一つは村の共同湯に、一つは旅館の客にあててあつた。私がそのどちらかにはいつていると、きまつてもう一つの方の湯に何かが来ている気がするのである。村の方の湯にはいつているときには、きまつて客の湯の方に男女のぼそぼそ話しをする声聞きこえる。私はその声のものを知っていた。それは浴場についている水口で、絶えず清水がほとばしり出ているのである。また男女という

想像の由よつて来るところもわかっていた。それは溪の上にだるま茶屋があつて、その女が客と夜更けて湯へやつて来ることがありうべきことだったのである。そういうことがわかつていながらやはり変に気になるのである。男女の話しが水口の水の音だとわかつていながら、不可抗的に実体をまとい出す。その実体がまた変に幽霊のような性質のものに思えて来る。いよいよよそうなつて来ると私はどうでも一度隣の湯を覗のぞいて見てそれを確めな  
いではいられなくなる。それで私はほんとうにそんな人達が来ているときには自分の顔が  
変な顔をしていないようにその用意をしながら、とりあいの窓のところまで行つてその硝ガ  
子戸ラスを開けて見るのである。しかし案の定なんにもいない。

次は客の湯の方へはいつているときである。例によつて村の湯の方がどうも気になる。今度は男女の話しではない。気になるのはさっきの溪への出口なのである。そこから変な奴がはいつて来そうな気がしてならない。変な奴つてどんな奴なんだと人はきくにちがいない。それが実にいやな変な奴なのである。陰鬱な顔をしている。河鹿かしかのような膚をしている。そいつが毎夜極つた時刻に溪から湯へ漬かりに来るのである。プフウ！ なんとという馬鹿げた空想をしたもんだらう。しかし私はそいつが、別にあたりを見廻すというのでなく、いかにも毎夜のこのように陰鬱な表情で溪からはいつて来る姿に、ふと私が隣

の湯を覗いた瞬間、私の視線にぶつかるような気がしてならなかったのである。

あるとき一人の女の客が私に話をした。

「私も眠れなくて夜中に一度湯へはいるのですが、なんだか気味が悪るござんしてね。隣の湯へ溪から何かがはいって来るような気がして——」

私は別にそれがどんなものかは聞きはしなかった。彼女の言葉に同感の意を表して、やはり自分のあれは本当なんだなと思ったのである。ときどき私はその「牢門」から溪へ出て見ることがあった。轟々たる瀬のたぎりは白蛇の尾を引いて川下の闇へ消えていた。向こう岸には闇よりも濃い樹の闇、山の闇がもくもくと空へ押しのぼっていた。そのなかで一本<sup>むく</sup>棕の樹の幹だけがほの白く闇のなかから浮かんで見えるのであった。

これはすばらしい銅板画のモチイフである。黙々とした茅<sup>ぼう</sup>屋<sup>おく</sup>の黒い影。銀色に浮かび出ている竹藪の闇。それだけ。わけもなく簡単な黒と白のイメージである。しかしなんという言いあらわしがたい感情に包まれた風景か。その銅板画にはここに人が棲んでいる。戸を鎖し眠りに入っている。星空の下に、闇黒のなかに。彼らはなにも知らない。この星

空も、この闇黒も。虚無から彼らを衛まもっているのは家である。その忍苦の表情を見よ。彼は虚無に対抗している。重圧する畏怖いふの下に、黙々と憐れな人間の意図を衛まもっている。

一番はしの家はよそから流れて来た浄瑠璃語りの家である。宵のうちはその障子に人影が写り「デデンデン」という三味線の撥音と下手な嗚咽の歌が聞こえて来る。

その次は「角屋」の婆さんと言われている年寄つただるま茶屋の女が、古くからいたその「角屋」からとび出して一人で汁粉屋をはじめている家である。客の来ているのは見たことがない。婆さんはいつでも「滝屋」という別のだるま屋の囲爐裡の傍で「角屋」の悪口を言つては、硝子戸越しに街道を通る人に媚を送っている。

その隣りは木地屋である。背の高いお人好の主人は猫背で聾つんぼである。その猫背は彼が永年盆や膳を削けずつて来た刳物台くりものだいのせいである。夜彼が細君と一緒に温泉へやって来るときは恰好を見るがいい。長い頸くびを斜に突き出し丸く背を曲げて胸を凹へこましてはいる。まるで病人のようである。しかし刳物台に坐っているとときの彼のなんとがっしりしていることよ。彼はまるで獲物を捕った虎のように刳物台を抑え込んでしまっている。人は彼が聾であつて無類のお人好であることすら忘れてしまうのである。往来へ出て来た彼は、だから機械から外して来たクランクのようなものである。少しばかり恰好の滑稽なのは仕方がないの

である。彼は滅多に口を利かない。その代りいつでもこにこしている。おそらくこれが人の好い聾の態度とでもいうのだろう。だから商売は細君まかせである。細君は醜い女であるがしつかり者である。やはりお人好のお婆さんと二人でせつせと盆に生漆ききうるしを塗り戸棚へしまい込む。なにも知らない温泉客が亭主の笑顔から値段の応対を強取しようとするときには、彼女は言うのである。

「この人はちつと眠むがつてるでな……」

これはちつとも可笑おかしくない！ 彼ら二人は実にいい夫婦なのである。

彼らは家の間まの一つを「商人宿」にしている。ここも按摩が住んでいるのである。この「宗さん」という按摩は浄瑠璃屋の常連の一人で、尺八も吹く。木地屋から聞こえて来る尺八は宗さんのひまでいる証拠である。

家の入口には二軒の百姓家が向い合って立っている。家の前庭はひろく砥石とどしのように美しい。ダリヤや薔薇ばらが縁を飾っていて、舞台のように街道から築きあげられている。田舎には珍しいダリヤや薔薇だと思つて眺めている人は、そこへこの家の娘が顔を出せばもう一度驚くにちがいない。グレートヘンである。評判の美人である。彼女は前庭の日なたで繭まゆをにながら、実際グレートヘンのように糸繰車を廻していることがある。そうかと思う



と小舎ほどもある枯萱を「背負棒」で背負つて山から歸つて来ることもある。夜になると弟を連れて温泉へやつて来る。すこやかな裸体。まるで希臘ギリシヤの水瓶である。エマニユエル・ド・ファツリヤをしてシャコンヌ舞曲を作らしめよ！

この家はこの娘のためになんとなく幸福そうに見える。一群の鶏も、数匹の白兔も、ダリヤの根方で舌を出している赤犬に至るまで。

しかし向かいの百姓家はそれにひきかえなんとなしに陰気臭い。それは東京へ出て苦学していたその家の二男が最近骨になつて歸つて来たからである。その青年は新聞配達夫をしていた。風邪で死んだというが肺結核だつたらしい。こんな奇麗な前庭を持つている、そのうえ堂々としたかけひ水溜りさえある立派な家のせがれ倅が、何故また新聞の配達夫というよくなひどい労働へはいつて行つたのだろう。なんと楽しい生活がこの溪間にはあるではないか。森林の伐採。杉苗の植付。夏の蔓切。枯萱を刈つて山を焼く。春になると蕨わらび、蕨ふきの臺とう。夏になると溪を鮎あしがのぼつて来る。彼らはいちはやく水中眼鏡と鉤針を用意する。瀬や淵へ潜り込む。あがつて来るときは口のなかへ一ぴき、手に一ぴき、針に一ぴき！

そんな溪の水で冷え切つた身体は岩間の温泉で温める。馬にさえ「馬の温泉」というものがある。田植で泥塗れになつた動物がピカピカに光つて街道を歸つてゆく。それからまた

晩秋の自然薯掘り。夕方山から土に塗れて帰って来る彼らを見るがよい。背に二貫三貫の自然薯を背負っている。杖にしている木の枝には赤裸に皮を剥がれた蝮が縛りつけられている。食うのだ。彼らはまた朝早くから四里も五里も山の中の山葵沢へ出掛けて行く。櫓や櫓を切り出して椎茸のぼた木を作る。山葵や椎茸にはどんな水や空気や光線が必要か彼らよりよく知っているものはないのだ。

しかしこんな田園詩のなかにも生活の鉄則は横たわっている。彼らはなにも「白い手」の嘆賞のためにかくも見事に鎌を使っているのではない。「食えない！」それで村の二男や三男達はどこかよそへ出て行かなければならないのだ。ある者は半島の他の温泉場で板場になっている。ある者はトラックの運転手をしている。都会へ出て大工や指物師になっている者もある。杉や櫓の出る土地柄だからだ。しかしこの百姓家の二男は東京へ出て新聞配達になった。真面目な青年だったそうだ。苦学というからは募集広告の講談社的な偽瞞にひつかかったのにちがいない。それにしても死ぬまで東京にいるとは！ おそらく死に際の幻覚には目にたてて見る塵もない自分の家の前庭や、したり集って来る苔の水が水晶のように美しい筧の水溜りが彼を悲しませたであろう。

これがこの小さな字である。

## 断片 二

温泉は街道から幾折れかの石段で溪ぎわまで下りて行かなければならなかった。街道もそこまでは乗合自動車がやって来た。溪もそこまでは——というところし比較が可笑しくなるが——鮎が上つて来た。そしてその乗合自動車のやって来る起点は、ちょうどまたこの溪の下流のK川が半町ほどの幅になって流れているこの半島の入口の温泉地なのだった。温泉の浴場は溪ぎわから厚い石とセメントの壁で高く囲まれていた。これは豪雨のときに氾濫する虞おそれの多い溪の水からこの温泉を守る防壁で、片側はその壁、片側は崖の壁で、その上に人々が衣服を脱いだり一服したりする三十畳敷くらいの木造建築がとりつけてあった。そしてこれが村の人達の共同の所有になっているセコノタキ温泉なのだった。

浴槽は中で二つに仕切られていた。それは一方が村の人の共同湯に、一方がこの温泉の旅館の客がはいりに来る客湯になっていたためで、村の人達の湯が広く何十人もはいれるのに反して、客湯はごく狭くそのかわり白いタイルが張ってあったりした。村の人達の湯にはまた溪ぎわへ出る拱門型に削くった出口がその厚い壁の横側にあいていて、湯に漬って

眺めていると、そのアーチ型の空間を眼の高さにたかまって白い瀬のたぎりが見え、溪ぎわから差し出ている楓かえでの枝が見え、ときには弾丸のように擦過して行く川鳥かわうの姿が見えた。

### 断片 三

温泉は街道から幾折にもなった石段で溪の脇まで降りて行かなければならなかった。そこに殺風景な木造の建築がある。その階下が浴場になっていた。

浴場は溪ぎわから石とセメントで築きあげられた部厚な壁を溪に向かって回めぐらされていた。それは豪雨のために氾濫する虞おそれのある溪の水を防ぐためで、溪ぎわへ出る一つの出口がある切りで、その浴場に地下牢のような感じを与えるのに成功していた。

何年か前まではこの温泉もほんの茅かやぶき葺屋根の吹き曝さらしの温泉で、桜の花も散り込んで来たし、溪の眺めも眺められたし、というのが古くからこの温泉を知っている浴客のいつもの懐旧談であったが、多少牢門じみた感じながら、その溪へ出口のアーチのなかへは溪の楓が枝を差し伸べているのが見えたし、瀬のたぎりの白い高まりが眼の高さに見えたし、時にはそこを弾丸のように擦過してゆく川鳥の姿も見えた。

また壁と壁の支えあげている天井との間のわずかの隙間からは、夜になると星も見えたり、桜の花片だって散り込んで来ないことはなかつたし、ときには懸巢かけすの美しい色の羽毛がそこから散り込んで来ることさえあつた。



# 青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.jutyama

校正：二宮知美

1998年12月14日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 温泉

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>